《講演記録》

原口のモデル橋口五葉の〈言行一致〉

――独身者問題小説としての『三四郎』――

藤井淑禎

一

今日は漱石の作品中でも『吾輩は猫である』や『心』などと並んで広く知られている『三四郎』（一九〇八・九～一二連載、一九〇九・五刊）という作品について、私が二人の方と一緒に注釈を担当した『漱石文学全注釈　七　三四郎』（二〇一八）の作業の中で気づいたことを中心に、これまでは見逃されてきた『三四郎』のもう一つの側面についてお話したいと思います。

従来、『三四郎』と言えば、古くは一種の自己形成小説（ドイツ語で言うビルドゥングスロマーン）という見方が一般的でした。九州の片田舎から上京して大学生になった三四郎が、学者たちや若い女性たち、さらには世間ずれした同年輩の男と交わることで、さまざまなことを学んで良くも悪くも成長していく物語、という見方です。これはこれでもちろん、作品の一面を言い当てた指摘なのですが、よく見ると、なかでも大きな割合を占めているのが、三四郎と里見美禰子という女性とのいわくいいがたい関係であることを次第に皆が気にするようになりました。それでもこの関係を自己形成途上の

単なる女性遍歴の一つとして捉えれば、従来からの「自己形成小説」という見方は崩れないのですが、それよりは大きく深刻なもの、と捉えれば、『三四郎』という作品は壮大な失恋小説であるとか、いずれにしても「自己形成小説」以外の、以上の、ものであると考えなくてはならなくなるのです。

今は昔、それも遥かな昔ですが、私が大学院生だった頃に新たな問題として浮上してきたのが、その三四郎と美禰子との関係に焦点化して、果して『三四郎』は「自己形成小説」以上のものなのかどうかという議論でした。当時私は卒論こそ漱石の初期短編を取り上げましたが、大学院に入ってからは明治初期文学、翻訳家の森田思軒とか、政治から文学・新聞までマルチな活躍をした矢野龍渓、さらには二葉亭四迷などを研究対象としていましたから、ある程度の関心はあったものの、この『三四郎』論争には加わりませんでした。ただ、当時この論争の中心にいた一人が、私の師である越智治雄さんであったということもあって、自分なりにいろいろ考えてはみた記憶があります。

いま振り返ると誰もが妙なことをあれこれ言ったり考えていたものだなという忸怩たる思いもあるのですが、その論争の中で大きなポイントとなっていたのが、美禰子の三四郎への思いは本物だったんだろうか、という論点であったような記憶があります。それまでは、つまり「自己形成小説」として見られていた頃は、もっぱら美禰子に翻弄された三四郎、という見方が有力でしたから、そうではなくて本気だったんだ、という見方は確かに新鮮で魅力的なものではありました。なにしろ時は七〇年代、精緻な読みを売りものとする作品論の全盛期でしたから、これまでは「自己形成小説」という方向で統一され、見逃されたり切り捨てられたりしてきた細部が浮上させられ、野々宮と美禰子がある時まで相思相愛であったのはもちろん、三四郎と美禰子も、三四郎はもちろん、美禰子の三四郎に対する気持ちもある時からある時までは真剣だった、というような解釈が主流を占めるようになってきたのです。その結果、従来「自己形成小説」一色で捉えられていた『三四郎』という作品が、三角関係小説（美禰子の三四郎に対する気持とか、男女の関係が双方向であってこそ正真正銘の三角関係です）、ないしは壮大な失恋小説という側面も持ち合わせていたことが明らかとなったのです。

二

『三四郎』の研究史はその後長い停滞期に入ります。これは『三四郎』や漱石作品に限らず、どっと研究され尽した後に停滞期が待っているのは世の常ですが、『三四郎』の場合もその例外ではなかったということです。そしてこれもまた一般的に、そうした停滞期にあった作品に新風が吹き込まれるのは、新たに全集が編まれたり、従来とはまったく異なる研究方法が紹介されたりした時であることが往々にしてあるのです。ここで我田引水を承知で言えば、『三四郎』の場合それが私たちが注釈を試みた『漱石文学全注釈　七　三四郎』の出現であったのです。

そしてここで私が提出したのが今日のお話の副題にもあるように「独身者問題小説」という見方だったのです。ちなみに私の注釈担当部分は九章から十三章までですが、独身者問題に触れたのはもっぱらこの部分ですので、「私が提出した」という言い方をさせていただきました。そうはいっても独身者問題がこれまでまったく見逃されていたというわけではありません。何しろ、作品中に明らかにそれに触れた部分があるのですから、論者のほうも無視するわけにはいかなかったのです。『三四郎』における独身者問題は多くは広田先生がらみで登場するのですが、従来はこれらの部分はどちらかというと扱いにくいものみなされ、持て余され気味でした。確かに独身者問題は書かれてはいるのですが、これをどう位置づければよいのかとか、困ったものだとかいうような受け止め方が一般的だったのです。

具体例をあげてみましょう。広田と独身者問題は『三四郎』の十一章に出てきます。有名な部分ですが、広田宅を訪れた三四郎に、広田が唐突に「生涯にたつた一遍逢つた女に、突然夢の中で再会したと云ふ小説染みた御話」をする場面があります。

「えゝ。何んな女ですか」
「十二三の綺麗な女だ。顔に黒子がある」
三四郎は十二三と聞いて少し失望した。
「何時頃御逢ひになつたのですか」
「二十年許前」
三四郎は又驚いた。
「善く其女と云ふ事が分りましたね」

「夢だよ。夢だから分るさ。さうして夢だから不思議で好い（後略）」

驚く三四郎に、広田は饒舌にその後を続けます。なんと女は「昔の通りの顔」、「昔の通りの服装」、「髪も昔の髪」で、要するに「二十年前見た時と少しも変らない十二三の女」の姿であったというのです。広田がその理由を聞くと、「あなたに御目にかゝつた時」の顔や服装や髪が好きだからこうしているのだと女は答えます。対する広田はもちろん「大変年を御取りなすつた」（女の言葉）中年男性の姿であったわけですから、そこから、これまた有名な、「あなた（女）は画だ」、「あなたは詩だ」という禅問答のようなやりとりが交わされることになります。

さきほど広田先生をめぐる独身者問題は、従来、どう位置づければよいかとか、困ったものだとかいうような受け止め方をされてきたと言いましたが、たとえばこんな、夢とはいえ非現実的でファンタジックな設定や禅問答めいたやりとりが読者を戸惑わせてきたのです。で、結局この部分がどう処理されて来たかと言いますと、「あなたに御目にかゝつた時」の顔や服装や髪が好きだから、のあたりを根拠として、広田・女の場合と三四郎・美禰子の場合とを重ね合わせる理解が一般的でした。その直前の十章で、原口に描いてもらっている美禰子の姿が、三四郎と池のほとりで出会った時の「服装（なり）」とポーズであることを美禰子が三四郎に打ち明ける場面があり、それと関連付けて受け取られてきたのです。

すなわち三四郎の中で美禰子のあの日の姿は永遠に生き続け、その意味で広田は未来の三四郎の姿だという解釈です。この解釈をめぐっては、広田と女の出会いは路傍で葬列を見送る側と見送られる側（馬車の中）であったにも関わらず、夢の中の再会ではそれが三四郎と美禰子の場合を連想させる「大きな森の中」へと変更されているのも、説得力を増すのに一役買っています。

ところでここからが肝心の独身者問題ですが、広田の夢の話には後半がありました。「それから其の女には丸で逢はないんですか」との三四郎の問いに、まるで逢わないしそもそもどこの誰かもわからないと答える広田に対して、「夫で結婚をなさらないんですか」と問い詰めているのです。この問いに対していったんははぐらかしたものの、「然し、もし其女が来たらお貰ひになつたでせう」とさらに詰め寄られると、「さうさね」と言ったあとで「貰つたらうね」と、本音を吐

露しているのです。すなわち一期一会の相手と再会できなかったがゆえに広田は独身を押し通していたということがわかるのです。

ただ、広田はここから話をはぐらかすかのように、強引に、世の中には他にもいろいろ「結婚のしにくい事情」があるのだという方向に話題をもっていってしまいます。そしてそこに登場するのが、夢の中での再会と比べても負けず劣らずミステリアスな、母の死に際に「実は誰某（たれがし）がお前の本当のお父（とう）さんだ」と打ち明けられて「結婚に信仰を置かなくな」った息子の話だったのです。母の愛が父ではない別の男に向けられていたわけで、そうした愛なき結婚生活への幻滅が息子をして結婚をためらわせた、独身を余儀なくされた、というエピソードですが、「然し先生のは、そんなのぢや無いでせう」という三四郎の言葉を否定するでもなく「僕の母は憲法発布の翌年に死んだ」と応じていることから推せば、もう一つの広田の独身理由をここにうかがうことも十分可能なように書かれているのです。

この、夢の中の少女との再会や、母が姦通した結果生まれた息子の話は、十一章の後半に突如として出てきて、そしてすぐに姿を消してしまいます。広田が独身であることは小説を読んでいけばわかることですが、その理由らしきものがここに唐突に、しかも孤立した形で出てくるのです。出方が唐突であるばかりではありません。エピソードの中身も、見てきたようにどちらかというと荒唐無稽に近いような突拍子もないものです。それゆえに従来これらの部分は扱いにくいものみなされ、持て余されてきたのです。

作品の中にとどまる限り、言えるのはこれくらいですが、実はこの時期、独身者問題は多くの人々の関心を集め、それをめぐる本も多く出版されていました。そしてその背景なら容易に想像がつきます。欧米から恋愛結婚イデオロギーが流入して、それまでのような形式的な結婚が懐疑的に見られるようになり、愛のない結婚をするくらいなら独身のままで、と考える男女が出現するようになったからでしょう。いま、手元にある本や国立国会図書館のデジタルコレクションで見た本のなかから、独身者問題を扱った本をいくつかあげてみると、以下のようになります。

堺枯川『家庭の教育』一九〇二年
小畴（うね）三郎『結婚哲学』一九〇六年
湯朝観明『結婚論』一九〇六年

幡幽泉『細君のため』一九〇六年
伊藤銀月『新家庭観』一九〇八年
覆面野史『現代男女の研究』一九〇九年

『三四郎』の連載は一九〇八年ですから、いかにこの作品が独身者問題が沸騰していた時期に書かれていたかがわかります。そしてそのなかで注目を集めていたのが、何らかの理由で一緒になれなかったケース（＝死別、失恋、離れ離れ等々）と愛なき結婚への嫌悪という、さきほどの二つの独身理由だったのです。ですから、作中への登場が見てきたようにどれほど唐突で内容的にも突拍子もないものであったとしても、当時の同時代読者にはすぐ合点がいったことでしょう。その意味で『三四郎』は疑いもなく、当時の沸騰する独身者問題に掉さした小説であったのです。

愛なき結婚に関しては、小畴三郎の『結婚哲学』が、このように述べています。

独身主義は更に恋愛の神聖てふ感念より起る、是れ又必然的結果なり、愛なき麗しからざる結婚は人生の一大罪悪なり、愛して愛を得ず、恋して恋を得ざるものは去りて愛なきに行かざる可らざるか、否、愛なきに行くは罪悪なり、此に於て独身主義の必要を感ぜざる可らず、人生れて愛を得ずむば独身主義の人たらざる可らざるなり、斯くの如くにして愛の目的は又達せられたるなり。

愛なき結婚をするくらいなら独身でいるほうが愛の目的を達したことになる、というのですから、極端なまでの愛論、独身論にも見えますが、たとえば『心』の先生もかつては「此方でいくら思つても、向ふが内心他の人に愛の眼を注いでゐるならば、私はそんな女と一所になるのは厭なのです」（下の三十五）と考え、「否応なしに自分の好いた女を嫁に貰つて嬉しがつてゐる人」を「愛の心理がよく呑み込めない鈍物」と見ていたのですから、同時代的には決して極端な考えというわけではなかったのです。

そして小畴三郎『結婚哲学』があげる二つ目の独身理由が恋人や伴侶を失うことだったのです。ここではアメリカの作家アーヴィング（Washington Irving, 一七八三―一八五九）の場合が例にあげられ、恋人を喪った彼が死後も彼女に愛を捧げ続け、「七十有余歳まで独身主義」を貫いたことが称賛されています。「愛を得ずんば、愛を失はゞアービングの如く独身

の生涯を送らざる」をえないわけで、そうした独身主義は「実に崇高なる超然的極めて善美」なものだと言っています。その対極にあるのが、「結婚は人生の義務なり」と誤信して「愛を蹂躙し」、「無意識なる結婚」を急ぐ従来の風潮であると厳しく糾弾しています。

独身者問題論争の中では、独身理由は、必ずしも上記の二つに限られるわけではありませんでした。天職に身を捧げるため（与次郎は広田の独身理由をこれだと見ています）、生活苦、過去の失敗に懲りて、男尊女卑の家庭への幻滅、依頼心虚栄心のかたまりである夫婦なるものへの嫌悪、とかく秘密主義に陥りがちな女性への不信、などが諸書があげた他の独身理由ですが、そのなかでも二大理由とでも言うべきなのが、広田の場合に見られた、何らかの理由で一緒になれなかったケース（＝死別、失恋、離れ離れ等々）と愛なき結婚への幻滅だったのです。

三

独身主義者広田の背後には、同じく独身を貫いて（？）いる野々宮や原口画伯（美禰子の兄も同類でしたが近々結婚の噂も）も控えていることから、『三四郎』における独身者問題といえば、従来ともすれば壮年の男性独身者ばかりが注目されてきましたが、実は、より重要な独身者問題は、女性独身者のほうにあるのではないか、というのが今日問題提起させていただきたいことです。といいますか、もっと正確に言えば、三四郎も含めた若い未婚男女における独身者問題こそが、独身者問題小説としての『三四郎』の眼目なのだということになります。その意味で、従来、独身者問題といえば判で押したように広田ら男性陣に注目してきたアプローチには重大な欠陥があります。

若い未婚男女における独身者問題という観点は実は私が言いだしたことではありません。これも、前掲の独身者問題を扱った諸本に教えられたことです。そのなかでも、大トリとしての女性独身者（もちろん美禰子とよし子のことです）は後回しにして、まずは若い男性独身者のほうを先に片づけておきましょう。遊び人ふうな与次郎は別格として、主人公三四郎の言動は独身者問題として見た時、どのような問題を提起していたでしょうか。

この問題を正面から取り上げているのが、幡幽泉の『細君のため』です。「独身者の家庭観」という節をもうけて、女

性なるものがとにかく嫌いで「生涯独身で暮す積り」の著者から見た家庭（ホーム）への不満を縷々述べています。前章の最後でまとめた諸書に見られる独身理由中の、男尊女卑の家庭への幻滅、とかく秘密主義に陥りがちな女性への不信、依頼心虚栄心のかたまりである夫婦なるものへの嫌悪、などはすべて幡幽泉『細君のため』があげた理由です。要するに、「家の庭と書いた字」（ホーム）がとにかく気に食わないというわけですが、それと同じくらい気に食わないのが、若い未婚男女のホーム志向だというのです。

△全体、この頃流行ものとなりましたところの、家の庭と書いた字が癪に障るのです。御覧なさい未だ脾弱い青書生や、前髪の揃はないところの娘たちが、乳臭い、黄色い嘴を為て居ながら、ホームだの家庭だのと言ふ面悪さ、其許りなれば未だしも良いのですけれども、そんな下らないことを思つて、学問も出来上らず、修業もつまぬうちから、若い男女が飯事でも為るやうなこと許りを考へて、真面目な大きな考へを持たないから万休です。

△それといふものが、家庭とか何んとかいふと大層体裁が可いのですけれども、結局人間夫婦家を持つといふことは、そこで楽を為やう、骨やすめを為やう、我儘を仕やう、遁ん坊をしやうと考へてるから間違つて居ます、抑も家庭といふものはそんな下らないものではありますまい、

それでは幡幽泉の考える家庭とはどのようなものであるかといえば、「世の中のある丈けの困難苦労を仕ぬいて、やつとこさと其れぞれの仕事を仕遂てこそ、その時にヤレヤレ疲労たと言つて、始めて愉快に満足を得られる」ような場所であり、その意味からも、「学問も出来上らず、修業もつまぬ」若い未婚男女が「飯事でも為るやうなこと許りを考へて」、「そこで楽を為やう、骨やすめを為やう、我儘を仕やう、遁ん坊をしやう」と夢想するような場所ではないというのです。従来『三四郎』という小説が、主人公がさまざまなことを学んで良くも悪くも成長していく物語＝風刺を駆使した一種の「自己形成小説」として見られてきたことは冒頭で紹介しましたが、幡幽泉のホーム批判、若者批判も、三四郎に代表される「学問も出来上らず、修業もつまぬ」若者への諷戒という点ではそれと軌を一にするものであったとみることができます。

四

独身者問題小説として『三四郎』を捉えた時、若い未婚男女における独身者問題こそがその中心ではないかと考え、まずは若い男性独身者である三四郎のほうを先に見たわけですが、前述のようにより重要なのは、美禰子とよし子という女性独身者のほうであるのはまちがいのないところです。だとしたら作中でこの二人の独身問題（裏側から見れば結婚問題にほかなりませんが）はどのように描かれていたでしょうか。

独身生活を謳歌しているかにみえた美禰子とよし子ですが、最初に結婚話が持ち込まれたのはよし子のほうでした。「よし子に縁談の口がある。国へさう云つてやつたら、両親も異存はないと返事をして来た。夫に就て本人の意見をよく確める必要が起つた」と兄である野々宮の言う通りです。通常縁談はまず親の所に話が行きますが、ここでは東京で起こった話なので（しかも兄の交遊圏内からの話であったことがのちに明らかとなります）、まず在京の兄の所へ話が行き、ついで兄が故郷の親の意向を確かめる、という順序になったようです。本人のところへ話が行くのがさらにその後になっているのは、通常の順序です。大日本女学会編『婦人宝典　巻の三』（一九一六）に、「本邦の婚姻は、父母、其子女の為に婚を選び、其然るべしと思ふ者あれば、是れを、其当人に告げ、異議無きに於ては、近親に計る、父母、当人、及び近親中の議熟するに及び、始めて、仲人に承諾の旨を通じ、結納の取りかはしを為し」とある通りです。もっとも、「女子は往往、父母近親の間に、充分熟議成りて、ほゞ、決定の上に告ぐるもの多し」ともありますから、女性の場合は、父母の次は近親、それから当人、というように、本人の意思確認が一段階後回しにされています。もっとも、どちらの場合でも本人の意思確認が必要とされている背後には時代の変化があったはずですから、その意味ではここで野々宮が「本人の意見をよく確める必要」があると言っているのは、新時代に適った対応であると言えるでしょう。

さて問題はこれに対するよし子の反応です。兄が妹に話を切り出す場面は描かれてはいませんが、どうもよし子はいったん聞いたその話に取り合おうともせず、兄が答えを催促すると、「能くつてよ。知らないわ」とけんもほろろの態度です。「だつて仕方がないぢゃ、ありませんか。知りもしない人の所へ、行くか行かないかつて、聞いたつて、好でも嫌で

もないんだから、何にも云ひ様はありやしないわ。だから知らないわ」というのがその理由なのです。

「知りもしない人の所へ、行くか行かないかつて、聞いたつて、好でも嫌でもないんだから」という言い方からは、あたかも候補者は既知の人物中から選ばれなくてはならないとよし子が決めてかかっているようにみえます。既知の人物であれば好きか嫌いかどちらかであり、「何にも云ひ様はありやしないわ」ということにはならないからです。かりに未知の人との結婚話が持ち上がった時は、その人となりをよく聞きよく確かめたうえで（時には実際に会ったりしながら）、結婚相手としてふさわしいかどうかを自分なりに判断する、という選択肢は、どうやらよし子のなかにはなかったようです。

恋愛主導型の自由結婚と親による強制結婚との対立は、明治も後半になると次第に鎮静化し、この時期は折衷型が主流となっていました。すなわち親の提案を子が熟慮し十分に納得したうえで受け入れる、というスタイルです。もちろん、その逆の、子が選んだ相手に親が同意する、というスタイルもありえますが、実際には難しかったようです。子が自分で適当な相手を選ぶことができるようになるには「男女交際の道が、もつと自由に且つ広く開け、選択の範囲が大に広くなつた上でなければならぬ」（伊藤銀月『新家庭観』、一九〇八）からです。

『新家庭観』の著者の伊藤銀月は同書のなかで繰り返し、理想を言えば「青年男女が自己の一生の大事の為に、充分慎重の態度を取つて、自由に配偶者を選択すると云ふのが新思潮にも合ひまた理論にも叶ふ」と断りつつも、現実には「自由に交際すると云つても、日本国中の青年男女が、皆互に往来すると云ふ訳には行かず、やはり極々少数の知人の間で、選び合ひをするのであるから、一番適当な人を選ぶと云ふ目的が充分に遂げられぬ」と指摘し、あわせて、青年男女は冷静な判断力に欠けたり、外見や経済力に惑わされたりというようなこともありがちなので、やはり親主導の折衷型が現時点ではベターである、と結論づけています。これらを踏まえるとよし子の言い分は、伊藤銀月の言う「極々少数の知人の間で、選び合ひをする」を志向しており、同時代的にはあまり好ましい態度とは言えなさそうです。

この時期沸騰していた独身の是非をめぐる論議のなかでは、女性のそれもしばしば取り上げられていました。女性の意識の高まりとともに「独身主義を唱える婦人が大分増加した」と指摘しているのは覆面野史の『現代男女の研究』ですが、

同書はその理由を、「男子の厄介などになつて僅に衣食を得るやうな、そんな意気地のないことでは困る、我等は一パシ独立して男子の向ふを張つて見せやうとの、一時の気概、悪しく云へば若い時の一種の驕慢心に駆られて居るのが多いらしい」と推測しています。

もっとも著者の覆面野史は、「若い時の一種の驕慢心に駆られて」という言い方からも察せられるように、それは女性たちの本意ではないと推測しています。「婦人の独身主義は、口の先きだけで、心中嫁に行きたいのは山々である」というのです。それがたまたま結婚話が持ち上がった際に「恥しくて充分其希望を云ひ得な」かったり、理想からかけ離れた相手を「嫌ひだと言ひ兼て」独身主義を口実としているうちに歳を重ね、「勢ひ独身生活を実行せねばならぬやうになるのもあるらしい」とも推測しています。それ以外にも、結婚に対するさまざまな恐怖心から独身主義を標榜したり、都会の女学校卒業後に帰郷し結婚するのをいやがったり、さらに上の高等教育を高望みしたり、等々の理由が独身婦人の増加を招いたと結論づけています。

要するに「二十歳前後の娘には、往々まだ人生の真意義が悟れないで、独身生活とか何とか、生意気な事を云ふもの」がいるが、そうした「一種の驕慢心」に振り回されることなく、「十九二十歳の花の盛りを空しく過ごさないで、其時に相当な配偶を択ぶ可」しというのが覆面野史の説く結論だったのです。そしてこれを『三四郎』中の女性独身者に適用するとすれば、兄からもたらされた結婚話を既知の人物でないからという理由だけで一蹴するよし子こそが、その悪しき実例ということになるのではないでしょうか。

そしてこの逆を行くのが、もう一人の女性独身者である美禰子だったのです。従来、結婚観という観点で見た時は、自主・慎重型のよし子に対して打算的功利的な美禰子、という見方が一般的でした。美禰子が、よし子が断った金縁眼鏡の若い紳士と短期間の間に結婚を決めてしまったからですが、しかしこれは同時代の尺度で見直すと、逆の結論が見えてきます。よし子が同時代的に否定的な形象であったことは前述の通りですが、美禰子の場合は結婚観も、若い紳士とのスピード結婚の理由も、本人の口からは直接語られることはありません。しかし、広田は美禰子を「自分の行きたい所でなくつちや行きつこない」（七章）と見ており、同様のことを与次郎も「夫として尊敬の出来ない人の所へは始から行く気はないんだから」（十二章）と言っています（しかも、この発言は美禰

子と若い紳士との結婚が決まってからのものです）。

愛のない形式的な結婚を否定した多くの独身者問題本と突き合わせても非の打ち所が無い態度と言ってよいと思いますが、もう一つの特徴であるスピード結婚ぶりについても、同時代に次のような言説があることに注意する必要があります。「縁組や夫婦の見立ては、咄嗟刹那に定めるに限る」、「テキパキどころか、おい来た宜しいで決めるに限る、頓着するな、早いが宜しい、どうしても神速が宜しいのである」――これは前掲の伊藤銀月『新家庭観』中の言葉です。しかも銀月がそう説く理由は明快です。いくら理想の夫像を思い描いても、こちらから申し込むわけにもいかない以上、「申込手がなかつたら何にもならない」し、したがって「女は唯結婚の申込のあつた場合に、其相手がどんなものであらうかと考へ見れば好いので、夫れも例外の酷いのでない限りは、経験に富んだ恩人なり両親なりの言葉に従つて差支がなからう」というのです。その意味でも「おい来た宜しいで決めるに限る」というわけです。美禰子のケースがほぼこれに該当することはまちがいないところでしょう。しかも、美禰子の場合はそれに加えて、「自分の行きたい所」、「夫として尊敬の出来」る人、という点も見極めてのことであったようですから、打算的とか忽卒といった後世の悪評とは裏腹に、当時としては理想的な結婚スタイルであったと言っても過言ではなさそうです。そして美禰子のこうした姿勢はおのずと、短絡的に「知りもしない人」への拒否反応を示すよし子の場合と対比されずにはいないでしょう。当初は仲のよい二人と見られていたよし子と美禰子ですが、結婚問題（裏側から見れば独身問題）の比重が大きくなるにつれて、物語後半におけるよし子と美禰子の対照性はどんどん強まるばかりなのです。

美禰子のことを「夫として尊敬の出来ない人の所へは始から行く気はないんだから」と見抜いていた与次郎は、その発言の前のほうで、同い年くらいの女性（美禰子のことです）に魅かれる三四郎をたしなめながら、前述の覆面野史と同じようなことを言っています。

「何故と云ふに。廿前後の同じ年の男女を二人並べて見ろ。女の方が万事上手だあね。男は馬鹿にされる許だ。女だつて、自分の軽蔑する男の所へ嫁に行く気は出ないやね。尤も自分が世界で一番偉いと思つてる女は例外だ。軽蔑する所へ行かなければ独身で暮すより外方法はないんだから。よく金持の娘や何かにそんなのがあるぢやな

いか、望んで嫁に来て置きながら、亭主を軽蔑してゐるのが。美禰子さんは夫よりずつと偉い。其代り、夫として尊敬の出来ない人の所へは始から行く気はないんだから（後略）」

「自分が世界で一番偉いと思つて」「独身で暮す」か、形だけは結婚しても「亭主を軽蔑してゐる」ような女性と言った時、与次郎がよし子をイメージしていたかどうかはわかりませんが、いずれにしてもそれと正反対なのが美禰子だと与次郎は見ているのです。覆面野史の別の表現を借りるなら、「若い時の一種の驕慢心に駆られて」「独身主義を唱える婦人」よし子に対して、「おい来た宜しい」（伊藤銀月）で即決した美禰子、と見立てることができます。このように見てくれば、独身者問題小説としての『三四郎』の中心に位置するのが、このよし子と美禰子の対照性であったことはもはや明らかでしょう。

五

今日のお話は、メインタイトルが「原口のモデル橋口五葉の〈言行一致〉」、サブタイトルが「独身者問題小説としての『三四郎』」ですが、ここまでがサブタイトルに相当する部分です。ここからはメインタイトルのほうに移行しようと思いますが、この二つは必ずしも密接に関わってはいません。その意味では今日のお話は二部構成であると言ってもいいのですが、そうは言ってもサブタイトルとメインタイトルがまったくつながっていないというわけではありません。もうお察しのように、両者をつなげているものこそ、原口画伯という存在です。というのも、結婚へと踏み出していった美禰子の歩みに少なからぬ影響を与えたのではないかと思われるのが、原口だったからです。

一読すれば明らかなように、美禰子が結婚へと踏み出していく時期に多くの時間を共にしていたのが、ほかならぬ原口だったのです。もちろん、大作「森の女」に向けての写生・制作作業のことを指しているのですが、「原口が広田先生の所へ来て、美禰子の肖像を描く意志を洩らしてから、まだ一ケ月位にしかならない。展覧会で直接に美禰子に依頼してゐたのは、夫より後の事である」（十章）としても、美禰子自身の証言によれば、実は「其前から少し宛描いて頂いてゐた」（同前）というのです。聞き手である三四郎とのやりとりによ

れば、「其前」とは「単衣（ひとえもの）」を身にまとっていた頃、すなわち三四郎と池畔で出会った九月上旬頃を指すようです。

この三四郎とのやりとりの時期がかりに十二月上旬であるとして、のちに美禰子と結ばれることになる金縁眼鏡の若い紳士がこの日迎えに来ていたことからもわかるように、この日までには美禰子はすでに結婚の決意を固めていた可能性があります。そうだとしたら、結婚への決意を固めていったであろうこの時期に、写生・制作作業を通じて美禰子と多くの時間を共にしていた原口からの影響の可能性は無視できないものとなってくるのです。

ただ、そうは言っても、原口が美禰子に直接、結婚問題についてアドバイスしたというような場面などは作品中には存在しません。しかし、独身問題、結婚問題について、原口が自分の考えを述べたシーンならあります。直接の聞き手は三四郎ですが、「小川さん面白い話がある」と切り出した原口が紹介したのは、「細君が厭になつて離縁を請求した」ものの受け入れてもらえず、やむなく自分が家を出ると言ったところ、それでは「後が困る」と泣きつかれたので、「何構はないさ、御前は勝手に入夫でもしたら宜からう」と突き放したという、いささか意味不明なエピソードでした。

もっとも、これは『吾輩は猫である』などにもよくあるような、無くもがなの枕に過ぎず、原口が言いたかったのは、その直後に語られた以下の部分だったようです。

「何うもならないのさ。だから結婚は考へ物だよ。離合聚散、共に自由にならない。広田先生を見給へ、野々宮さんを見給へ、里見恭助君を見給へ、序に僕を見給へ。みんな結婚をしてゐない。女が偉くなると、かう云ふ独身ものが沢山出来て来る。だから社会の原則は、独身ものが、出来得ない程度内に於て、女が偉くならなくつちや駄目だね」（十章）

これに、前述の覆面野史の「我等は一パシ独立して男子の向ふを張つて見せやうとの、一時の気概、悪（あ）しく云へば若い時の一種の驕慢心に駆られて」「独身主義を唱える婦人」が増加したという見解も加えて敷衍すれば、「女が偉くなると」女性の独身者も（覆面野史説）、男性の独身者も（原口説）増えて困る、というところあたりが原口発言のポイントであったと考えられます。そしてそれに対する原口の処方箋は、「独身ものが、出来得ない程度内に於て、女が偉くならなく

つちや」、言い換えれば、あまり女性が偉くなりすぎないように、であったというわけです。

この発言はこの場にいた美禰子も耳にしていますが、憶測を承知で言えば、それ以前から美禰子は同様のことを聞かされていたとも考えられます。というより、この種の説は、すでに見てきた覆面野史の『現代男女の研究』や、身近なところでは「自分が世界で一番偉いと思つてる女は例外だ。軽蔑する所へ行かなければ独身で暮すより外方法はないんだから」と述べていた与次郎を始めとして、世の中に広く行われていたと考えられます。だとしたら、美禰子はそれらの言説に耳を傾けつつ、他方ではかつては姉妹も同然であったはずのよし子を反面教師とすることで、結婚への決意を固めていったのではないでしょうか。

六

原口の美禰子への影響を指摘したここまでで、今度こそ本当にサブタイトルの「独身者問題小説としての『三四郎』」は終わりです。残るは、メインタイトルの「原口のモデル橋口五葉の〈言行一致〉」ということになりますが、原口と五葉の関係を最初に指摘したのは、小宮豊隆の「『三四郎』の材料」（『漱石寅彦三重吉』、一九四二）です。

その前に橋口五葉のことを江藤淳編『朝日小事典　夏目漱石』（一九七七）から簡単に紹介しておくと（担当・大野淳一）、本名は清、一八八一年に鹿児島で生まれ（一九二一年没）、一九〇五年に東京美術学校洋画科を卒業。兄の橋口貢ともども漱石の出発期から画を通じて親密な交流を続け、『吾輩は猫である』や『漾虚集』を始めとして多くの装丁や挿画を担当し、漱石から愛され、また信頼されました。一九一一年に三越呉服店のポスターともなった「此美人」を始めとして多くの秀作をのこし、晩年は浮世絵版画の研究・普及・制作に打ち込んだことでも知られています。

さてそこで小宮豊隆の「『三四郎』の材料」ですが、多くの材源を指摘した中で、原口と五葉のつながりについては「勿論原口さんの画室に這入つた時の感じは、正に橋口五葉の画室に這入つた時の感じと、そつくりそのままの感じである」と指摘しています。原口の画室の様子は、十章で三四郎が美禰子に会うために原口家を訪ねる場面で描写されています。床に敷かれた絨毯に虎の皮、大きな甕、そこから突き出た金箔で装飾された二本の矢、そのかたわらの卯の花縅の鎧、

幔幕の綱を通してつるされた元禄調の金糸刺繍の小袖、そしてそれらのまわりを無数の画や下画がとりまく、といったきらびやかさです。

これが五葉の画室の様子にそっくりだと指摘しているのです。小宮が五葉の画室を訪れたのが確実なのは、『三四郎』連載終了後に五葉が兄貢とともに谷中清水町から赤坂区仲町に転居した後の四月十八日のことですが（荒正人『増補改訂漱石研究年表』、一九八四）、もちろん小宮が谷中清水町時代の画室の様子を知っていた可能性も十分ありますから、「橋口五葉の画室」とはその頃のものを指すのかもしれません。少なくとも漱石は『三四郎』連載以前から五葉とは頻繁に行き来する仲でしたから、画室の様子は熟知していたはずです。

実は小宮の指摘を待つまでもなく、原口の画室とそっくりだという、五葉の谷中清水町時代の画室の様子をうかがわせる資料があるのです。『三四郎』本文中に小袖をつるした様子を「虫干の時の様に」と形容した個所がありますが、「虫干」というのは五葉が自分の画室を写生した作品のタイトルでもあったのです。五葉は一九〇四年九月に「虫干」というタイトルの油彩静物画を完成させており、それを同年九月から十一月までひらかれていた白馬会展に出品していたのです（山西健夫「橋口五葉―画業前半期の作品と制作状況を中心に」、岩切信一郎編「橋口五葉年譜」など。いずれも『生誕130年　橋口五葉展』所収、二〇一一）。

山西論が紹介する一九〇四年八月二十八日付の橋口貢宛の五葉の絵葉書や、石井柏亭の「白馬会画評」（『明星』一九〇四年十一月）によれば、そこには龍頭の兜、紺糸縅しの鎧、刺繍を施した小袖、馬のあぶみ、虎の皮、支那焼きの花甕などが描かれており（現在はこの画は所在不明とのこと）、まさに『三四郎』で描かれていた原口の画室の様子そのままなのです。

ちなみに小宮が指摘したのは、原口の画室が五葉の画室そっくりであるというところまでで、作品「虫干」を始めとするその他の指摘は、五葉研究の成果に多くを負いながら今回私が初めて指摘したことです。小宮は原口の造型に五葉以外の人物も利用されていることから、画室がそっくりというところまでととめたようですが、私はさらにすすめて、原口のモデルは五葉である、とまで言うべきだと思っています。

『三四郎』の連載とも重なる一九〇八年八月から九月にかけて、五葉は第二回文展（同年十月）に出品するため「赤色の着物を着た婦人《元禄婦人》（油彩画）を制作」（「橋口五葉年譜」）していました。――「橋口清氏は文部省展覧会に出品

すべく赤色の着物を着たる『元禄婦人』を描きつつありと」（「消息」『美術新報』一九〇八年九月十九日発行）。しかし、結局この画は文展に出品された形跡はなく、完成したかどうかも含めて、消息不明となっています。この年の文展は、会場の不備、審査委員の人選をめぐるトラブルなどがあって出品を取りやめた画家もいたくらいですので、あるいはその余波を受けた可能性もあるかもしれません。ただ、いずれにしても『三四郎』の着想・執筆時期と重なることから、この画が美禰子を描いた「森の女」のヒントとなった可能性は高いのではないでしょうか。この時期は五葉にとっては「油彩画の大作」（山西健夫前掲論文）時代で、一九〇七年の「孔雀と印度女」は縦一六三・五センチ、同じ年の文展に出品され現在はモノクロ写真しか残っていない「羽衣」は一見したところさらにそれより大きいのではないかと想像されます。だとすれば、その翌年に制作に着手した「元禄婦人」が「長さは六尺（約一八二センチ）もある」（十章）とされる「森の女」と同規模のものであったとしても不思議はないでしょう。

原口＝五葉説にさらに瑣末なことを付け加えれば、原口の坊主頭スタイル（七章に「頭を五分刈りにした」とあります）も、五葉のそれと重なります。前掲の『生誕130年　橋口五葉展』には、五葉の自画像や写真も多く収録されていますが、それらは一貫して坊主頭スタイルなのです。さすがに晩年の写真（一九一九年から翌年にかけてのものとされる「自宅書斎にて」）や肖像画（平福百穂画、一九一二年から翌年にかけてのもの）になると前髪を横に流したスタイルも見られるようになりますが、一九一一年に代表作の「此美人」で三越呉服店の懸賞広告第一等を獲得した際のものは、正真正銘の坊主頭スタイルです。

ここまでで、メインタイトル中の「原口のモデル橋口五葉……」までは終わりです。残るは「の〈言行一致〉」のみですが、ここからは研究というよりは半ばジョークとしてお聞きください。五葉の言行が一致していると言っても、現在までに私は五葉の独身論、結婚論を確認したことはありません。はっきりしているのは、五葉ではなく原口が、女性が偉くなり過ぎると自分たちのような独身者が増えて困る、だからあまり偉くなり過ぎないように、と言っていたということだけです。そして「行」のほうですが、こっちは原口ではなく五葉が、生涯独身を貫いたということが、前掲の「橋口五葉年譜」からわかります。つまり、五葉をモデルとした架空の人物である原口の「言」と、原口のモデルにされた実在の人物である五葉の「行」とが一致していたわけで、それを私は冗

談半分に「原口のモデル橋口五葉の〈言行一致〉」と呼んだのですが、こんな遊びの部分もこれからの研究にはあっていいのではないか、と現在の私は考え始めています。

最後にもう一度、今度は真面目に全体を振り返らせて下さい。かつては広く「自己形成小説」と信じられていた『三四郎』という小説が、作品論の季節には「壮大な失恋小説」と読み替えられ、現在に至ったものの、同時代の独身者問題論争を背景に置くことで独身者問題小説としても読めることを明らかにしました。しかも、そこでいう独身者問題とは、従来のような広田ら男性陣をめぐるものではなく、若い未婚男女、なかでもよし子と美禰子の結婚に対する態度のくっきりとした対照性こそがその中心であるということを指摘しました。そしてそこでの作者の立場は明らかに、結婚へと踏み切った美禰子の側にあり、その意味では覆面野史『現代男女の研究』を始めとする多くの独身者問題本の立場とも共通するものであったということになります。以上で私のお話を終わりにさせていただきます。どうも長い間、御清聴ありがとうございました。

（ふじい・ひでただ　立教大学名誉教授）